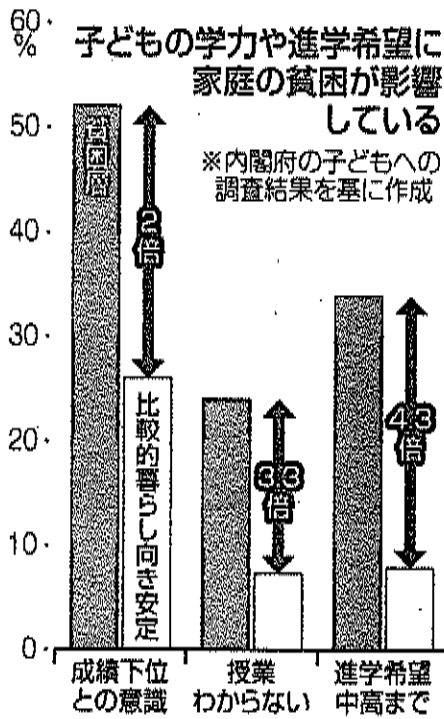


# 貧困層「授業分からない」3倍

内閣府調査

家庭の貧困が子どもの学習理解や進学を阻む傾向が、内閣府の初の全国調査で明らかになった。貧困層の子どもの学校の授業が「分からない」割合が、比較的暮らし向きが安定している層の三倍以上で、進学希望が「中学・高校まで」にとどまる割合は四倍以上だった。生まれた環境が人生を左右しかねない「親方チャ」がデータ面からも裏付けられ、対策が求められている。

調査は昨年二―三月、全国の中学二年生とその保護者五千組に郵送で実施し、回収率は54・3%。世帯の収入を調べ「貧困層」「準



貧困層」と、比較的に暮らし向きが安定している「それ以外」に分け分析した。子どもにクラスの中での成績をどう思うかを聞くと、貧困層は「やや下のほう」と「下のほう」の合計が52%と、それ以外の26%の二倍に上った。授業の理解度で「ほとんどわからない」と「わからない」が「比較的暮らし向き安定」の2倍に上った。授業の理解度で「ほとんどわからない」と「わからない」が「比較的暮らし向き安定」の2倍に上った。授業の理解度で「ほとんどわからない」と「わからない」が「比較的暮らし向き安定」の2倍に上った。授業の理解度で「ほとんどわからない」と「わからない」が「比較的暮らし向き安定」の2倍に上った。

上」は貧困層が28%で、それ以外の64・3%の半分以下だ。保護者に聞くと、傾向はさらに鮮明だった。保護者に進学の見通しが「高校まで」にとどまる理由を聞くと、「家庭の経済的な状況から考えて」が貧困層では44・4%を占めてトップ。「子どもの学力から考えて」や「子どもの希望」を上回っていた。

調査の報告書をまとめる検討会の構成員で、貧困家庭の子どもの学習支援などを担うNPO法人キッズドア（東京）の渡辺由美子理事長は「結果の多くは現場の実感とも一致した。親方チャがあることを認めたいうえで、なくしていく施策が必要だ」と話している。

(渥美龍太)